

國學院大學學術情報リポジトリ

学術論文における格助詞性複合辞の使用実態に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 学術論文, 格助詞性複合辞, 使用状況 キーワード (En): 作成者: 丁, 文静 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000063

学術論文における格助詞性複合辞の使用実態 に関する一考察

A Study on the Actual Condition of the Use of Case Participle Compound in Academic Papers

丁 文 静

キーワード：学術論文 格助詞性複合辞 使用状況

关键词：学术论文 格助词性的复合辞 使用情况

要旨

日本語学習者は、学術論文を執筆する際に、格助詞性複合辞を多数使っているにもかかわらず、適切に使いこなせないことが多い。そのため、落ち着きの悪い文を書いたり、適切に内容を読者に伝えられず誤解を与えたりすることがある。

本研究は、今後の日本語教育現場における、格助詞性複合辞の指導のため、特に大学、大学院における論文指導教育に役立てるという観点から、雑誌『日本語教育』『日本語の研究』『國學院雑誌』から学習者に求められる書き言葉における格助詞性複合辞を取り上げ、使用状況に関する調査・考察を行った。

摘要

日语学习者在写学术论文时，尽管使用了很多格助词性的复合辞，但往往因为不能恰当地运用，导致写出一些不太正确的句子，或者是因为没有向读者适当的传达想要表达的内容，从而造成误解。

本研究，为了今后在日语教育现场进行格助词性复合词的教学，特别是从对大学和研究生院的论文指导教学中发挥作用的角度出发，对《日语教育》、《日语研究》和《国学院杂志》3本杂志中出现的学习者在学术论文中会使用到的各个格助词性的复合辞进行了统计，并对其的使用进行了考察。

1. はじめに

格助詞性複合辞は、日本語の話し言葉にも書き言葉にも多数使用されている。格助詞性複合辞を対象とする量的研究には多くの蓄積があり、現在ではコーパス、電子テキストやデータベースを利用して調査を行うのが一般的である。

本研究では、日本語母語話者によって書かれた学術論文を対象として、書き言

葉に含まれる格助詞性複合辞の使用実態の考察を試みた。

2. 複合辞の位置付け—認定基準と分類について—

現代日本語では、「について」「に関して」「に対して」などのような助詞と似た働きをする形式があり、これまで文法的な位置付けは、「後置詞」と「複合格助詞」として位置づけられてきた。

鈴木 (1978)、高橋 (1983)、佐藤 (1989)、佐藤 (1990) などは、「について」「に関して」を動詞「つく」「関する」が後置詞化したものとして論じている。

鈴木 (1978) は、「単独では文の部分とはならず、名詞の格の形 (およびそのほかの単語の名詞相当の形式) とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係を表すために発達した補助的な単語である」とし、「日本語の後置詞は、英語などヨーロッパ語の文法の前置詞 preposition に対応するものであるが、名詞に対する位置が逆なので、後置詞 postposition と呼ばれる」と述べている。

高橋 (1983) は、「動詞が後置詞化すると、元の意味が稀薄になって、関係的な意味と機能が強く押し出されてくる。そして、元の意味と切れたところで再編成される。そのため、別の動詞から発達した後置詞が同じ関係的な意味と機能を持つようなことが起こる」と述べ、「この件について」のような例に表れる「について」について、動詞を核とし、「に」を除いた「ついで」の部分を取り出して「後置詞」と呼び、一つの独立した品詞としている。

複合辞の認定基準と分類に関する先行研究の主なものとして、砂川 (1987)、森田・松木 (1989)、松木 (1990)、塚本 (1991)、田中 (2010) などが挙げられるが、以下本稿では、森田・松木 (1989)、松木 (1990) によって論を進める。

複合辞の定義について、森田・松木 (1989) は、「いくつかの語が複合して、ひとまとまりの形で辞的な機能を果たすものを『複合辞』」と述べている。また、森田・松木 (1989) と松木 (1990) は、意味機能により複合辞を助詞性複合辞と助動詞性複合辞に分類し、助詞性複合辞をさらに係助詞性複合辞、格助詞性複合辞、副助詞性複合辞などに分類している。その上で、格助詞性複合辞をさらに分類した下位分類として、以下【表 1】に示すように、A から I まで 9 種類にまとめている

る。本研究ではこれに基づき、【表1】に示した格助詞性複合辞44種類⁽¹⁾(異なり数)を調査対象とし、考察を行う⁽²⁾。

【表1】意味機能による格助詞性複合辞の分類

格助詞性複合辞	A	資格・立場・状態・視点	として、をもって、でもって、にとつて、からすると、からすれば、からして、からいうと、からいえば、からいて、からみると、からみれば、からみて、からみたら
	B	対象・関連	について、につき、に関して、に対し(て ⁽³⁾)、をめぐって、にかけて(は・も)、かけると、かけても、につけ(て)
	C	仕手・仲介・手段・根拠・原因	によって、により、によると、によれば、をもって、でもって、を通して、を通じて、にして、につき
	D	時・場所・状況	において、にあつて、にあつて、に際し(て)、(の)折に、(の)折から、につけ(て)、にして
	E	起点・終点・範囲	からして、をはじめ、に至るまで、にかけて、を通じて、にわたつて
	F	基準・境界	をもって、でもって
	G	対応	によって(は)、により、によつたら、によると、によらず
	H	割合	について、につき、に対して
	I	同格	との、という、といった、ところの

(森田・松木(1989)、松木(1990)による)

3. 本研究の研究目的と課題

大学生・大学院生になると、日本語学習者は、より論理的、学術的な文章を書くことが要求されるようになるが、その一要因として格助詞性複合辞を適切に選択することも重要である。だが、日本語母語話者が書いた学術論文の格助詞性複合辞についての量的研究から抽出された助詞性複合辞をすべて学習者に暗記させることは現実的ではない。使用傾向と上位項目を考察し日本語教育に反映できれば、日本語学習者が論文を執筆する際、格助詞性複合辞の選択、自然な文の産出に繋げることができる。

- (1) 格助詞性複合辞は、歴史的・位相的・方言的に膨大な数があるが、本研究では「からすりゃあ」「からいやあ」など話し言葉的な要素を含む格助詞性複合辞については考察対象外とした。
- (2) なお、松木(1990)は意味機能による分類とは別に、形態による分類も行なっているが、本稿の論述と直接関係しないので、ここでは、それについては紹介しない。
- (3) ()は、()内の要素を付加しなくても可能なことを示す。

本研究では、日本語母語話者の学術論文に用いられる格助詞性複合辞に焦点を当て、収集したデータを計量的に考察し、その使用傾向について解明することを目的とする。具体的には、日本語母語話者が執筆した日本語教育領域と日本語学領域の学術論文における格助詞性複合辞の全体的使用状況を調査して、両学術誌における格助詞性複合辞の全体的使用状況を把握した上で、上位に現れるもの、また、使用されていない格助詞性複合辞の共通点、特徴、傾向を考察する。

これにより、学術論文に頻繁に使われているものと使用されにくい格助詞性複合辞の異同を明らかにするとともに、あわせて、両領域の学術論文における格助詞性複合辞の表記についても調査する⁽⁴⁾。

4. 調査の概要

4.1 調査対象の選定

日本語母語話者による学術論文における格助詞性複合辞の使用状況を考察するにあたり、査読のある以下の学術論文雑誌を対象とする。

下の【表2】は本研究の対象とした論文の掲載学会誌の詳細である。

【表2】対象とした論文の掲載学会誌

調査した学術雑誌名	発行者	論文掲載巻(号)	発行年	論文数
日本語教育	日本語教育学会	179号	2021年	10
日本語の研究	日本語学会	16巻1号-17巻2号	2020-2021年	6

【表2】に示した通り、本研究では、母語話者の学術論文については、日本語教育学会が発行した『日本語教育』179号(2021年)に掲載された学術論文10編および、日本語学会が発行した『日本語の研究』16巻1号-17巻2号(2020-2021年)に掲載された学術論文6編を対象とした⁽⁵⁾。

本調査では、母語話者の格助詞性複合辞の使用状況を全体的に把握するという目的のため、調査対象とする『日本語教育』『日本語の研究』にある学術論文のう

(4) なお、学術論文自体を言語資料としてその語法の傾向を考察した先行研究としては、接続詞を扱った徐(2020)、複合動詞を扱った高(2014)、モダリティを扱ったターインタ(2018)などがある。

(5) 調査対象とする論文本数と検索総語数を後の「付録1」「付録2」にまとめた。

ち、母語話者以外の研究者が発表した論文は分析の対象外とした。母語話者が執筆した各論文の中で考察対象とするのは、「題目」「要旨」「本文」と「謝辞」の部分である。学術論文の「参考文献」は、調査対象者以外の論文のタイトルと情報が含まれるため、「英語要旨」は、英語表記であるため対象外とした。

『日本語教育』から取り上げる調査対象としての学術論文は、「寄稿論文」「調査報告」「研究論文」「実践報告」とし、「特集について」「目次」「学会紹介」「入会紹介」「投稿要領」「特集テーマ」「あとがき」は、調査対象外とした。また、『日本語の研究』から取り上げる調査対象としての学術論文は、「掲載論文」「研究ノート」「資料・情報」とし、「特集」「書評」「短信」「小特集」「報告」は調査対象外とした。

4.2 データの抽出と分析方法

李ほか(2012)では、電子テキストを利用する利点は語彙や文法項目の出現状況が網羅的に分析できること、手作業による分析に比べて確認・抽出作業に漏れが少ないことであると述べられている。これに従い、本研究では、格助詞性複合辞を手作業で抽出する方法を用いず、考察対象の学術論文を電子テキスト化し、テキストエディタ「mi⁽⁶⁾」の Grep 機能を使用し格助詞性複合辞のデータを抽出した⁽⁷⁾。

手順としては、①【表1】にある44種すべてを文字列で検索した。②抽出した用例について、松木(1989)の「格助詞」相当の格助詞性複合辞に該当するかどうか、文脈を確認しながら、手作業で判断した。③電子テキストで前処理を行った上で、格助詞性複合辞の使用状況を収集し統計的処理を行った。また、誤差を減らすため、手作業でそれらの正確性を点検し、計量データを確認した。

両誌に見られる以下のような用例は格助詞性複合辞に該当しないと判断し、用例から除外した。

- (1) また、「2番と言った後に、顔を上げてOとUのほうを見るというふるまいが聞き手に応答を求めるものとして認識可能である。(「といった」『日本語教育』)

(6) Mi (えむあい) は macOS 用のテキストエディタである。1996年頃に「ミミカキエディット」としてリリースし、現在は「mi」と改称してバージョンアップを続けている。コーディングや、Webページ作成、原稿書き、レビュー、ログ解析などの作業を支援するテキストエディタである。

(7) 正確に電子化できているかどうか筆者自身で確認した後に分析を行った。

(2) 今後は、経路、移動領域以外に、起点の「を」についても、同様に調査し、古代における経路と起点の連続性を明らかにしていきたい。(「にして」『日本語の研究』)

両誌において、このような観点から除外した用例は、計54例あった。

5. 学術論文における格助詞性複合辞の全体的使用状況

今回の調査では、論述するために使用する格助詞性複合辞を調査対象とするため、各論文で引用している例文における用例は全て除外する。各論文の中で使用されている格助詞性複合辞の延べ語数を整理し、検出された出現頻度(延べ数) $\geq 1\%$ の格助詞性複合辞に絞って取り上げる。『日本語教育』と『日本語の研究』のそれぞれで使用されている格助詞性複合辞を延べ語数が多い順に以下の【表3】にまとめた。

今回の調査対象は、母語話者によって書かれた学術論文『日本語教育』の10本、『日本語学会』の6本の論文であった。格助詞性複合辞の出現率を見ると、『日本語教育』では総語彙数⁽⁸⁾ 163,790語、格助詞性複合辞1,349語(延べ語数)で、出現

【表3】『日本語教育』『日本語の研究』での格助詞性複合辞上位出現状況(延べ)

日本語教育 (N=1,349)				日本語の研究 (N=644)			
格助詞性複合辞	出現頻度	%	平均出現数	格助詞性複合辞	出現頻度	%	平均出現数
という	335	24.83	33.50	という	156	24.22	26.00
として	318	23.57	31.80	として	146	22.67	24.33
について	159	11.79	15.90	について	112	17.39	18.67
において	124	9.19	12.40	において	63	9.78	10.50
との	109	8.08	10.90	との	39	6.06	6.50
によって	70	5.19	7.00	によって	42	6.52	7.00
といった	43	3.19	4.30	により	21	3.26	3.50
に対し(て)	39	2.89	3.90	に対し(て)	11	1.71	1.83
により	32	2.37	3.20	に関して	11	1.71	1.83
にとつて	29	2.15	2.90	といった	7	1.09	1.17
を通して	17	1.26	1.70	-	-	-	-
計	1275	94.51		計	608	94.41	

(8) 記号・補助記号・空白を除く。すぐ後の『日本語の研究』についても同様。

率0.82、『日本語の研究』では総語彙数95,835語、格助詞性複合辞644語(延べ語数)で、出現率0.67であった。両誌における出現率は、『日本語教育』の方が多いことが確認できた。

【表3】に示すように、両誌で上位に出現する格助詞性複合辞の順位にはやや違いがあるが、出現している格助詞性複合辞はほぼ同じである。しかし、そのうち、『日本語教育』の上位に出現している「にとって」「を通して」⁽⁹⁾は『日本語の研究』では上位に見られない。『日本語の研究』の上位に出現している「に関して」は『日本語教育』の上位に出現していない。また、両誌で上位に出現している格助詞性複合辞の出現割合は近いが、「といたた」については『日本語教育』は『日本語の研究』の3倍近く見られるというように、語によって両誌の出現の仕方に多様の違いがあるものがあつた。

次に、44種の格助詞性複合辞のうち、両誌にそれぞれ出現していない格助詞性複合辞に注目する。両誌ともに出現していない格助詞性複合辞を以下の【表4】にまとめる。

【表4】『日本語教育』『日本語の研究』に出現していない格助詞性複合辞

	日本語教育	日本語の研究
両誌とも	からすると、からして、からいって、 からみたら、にかけると、によつたら、 によらず、(の)おりから、でもって	からみたら、にかけると、によつたら、 によらず、(の)おりから、でもって
一方のみ	からみて(1) ⁽¹⁰⁾ 、からみると(1)、から すれば(2)、からいうと(1)、 につけて(1)	ところの(6)、にあつて(6)、によると (5)、にあつて(3)、にわたつて(1)、 (の)おりに(1)、をめぐつて(1)、から いえば(1)

まず、両誌ともに出現していない格助詞性複合辞は「からすると」「からして」「からいって」「からみたら」「にかけると」「によつたら」「によらず」「(の)おりから」「でもって」の9種類である。論文の本数が異なっており、格助詞性複合辞の延べ語数に差があるにも関わらず、母語話者と学習者の学術的な文章における使用されにくい格助詞性複合辞の傾向がある程度見られると言える。

一方にしか出現していない語を見ると、「からみて」「からみると」「からすれ

(9) 表3では、この2語と、次にあげる「といたた」を、太字で示した。

(10) ()に『日本語の研究』に出現している個数を示す。(右同：『日本語教育』に出現している個数を示す)

ば」「からいうと」「につけて」は『日本語教育』には使用されておらず、『日本語の研究』には出現している。また、「ところの」「あって」「によると」「にあたって」「にわたって」「(の)おりに」「めぐって」「からいえば」は『日本語の研究』には出現していないが、『日本語教育』には現れている。『日本語の研究』に出現していない格助詞性複合辞の異なり語数が多く見られる。

そのうち、「ところの」の用例は、『日本語教育』に6例現れている。「ところの」の意味用法について、松木(1989)は、「用言の叙述を受け下の体言に続けて、上の語句が連体修飾語であることを明示する働きを持ち」とし、「古くから漢文訓読体で用いられていたが、普通はあまり用いない」と述べている。6例のうち、1例を(3)に示す。6例ともこのように「～で言うところの」という使い方であり、執筆者も同じ人物であった。現代の学術論文での使用は限られているのではないかと考えられる。

- (3)「学士力」という言葉を直接使用しているものは管見の限り見当たらなかったが、当然「学士力」、及び本論で言うところの「能力」に含まれると考えられる「批判的思考能力」の育成を国内の大学での日本語教育を通して行おうという報告は、近年増えてきている。(『日本語教育』179号)

6. 両誌における格助詞性複合辞表記の傾向

本多(2019)は、「構成要素の本来の意味が失われることによって、その表記には漢字ではなく仮名が用いられるようになるという点は、複合助詞にも言えることではないか」とし、「複合助詞は動詞が形式化した表現であるため、仮名で表記される傾向が強いことが予想される」とし、「複合の程度に差があるため、動詞の表記に仮名と漢字のいずれが用いられるかという程度は、複合助詞のそれぞれの形式によって異なる」と述べている。

以下、「をとおして」のように動詞が仮名で表記される場合を「仮名表記」、「を通して」のように動詞が漢字で表記される場合を「漢字表記」とする⁽¹¹⁾。他に、『日本語教育』は、漢字表記がある格助詞性複合辞「から見て」「から見ると」「から言う」と「から言って」「から見たら」「(の)折から」、『日本語教育』は、漢字表記が

(11) 本研究の調査では、片仮名で表記されたものが出現していない。

ある格助詞性複合辞「によると」「にあたって」「からみたら」「からいえば」「からいって」「をめぐって」「(の) おりに」「(の) おりから」も調べたが、漢字表記と仮名表記の頻度は、いずれも0である。

両誌における仮名表記のみと漢字表記のみの格助詞性複合辞を以下の【表5】にそれぞれまとめた。

【表5】両誌における仮名表記・漢字表記の出現状況

日本語教育				日本語の研究			
漢字表記		仮名表記		漢字表記		仮名表記	
に対し(て)	39	にたいして	0	に対し(て)	11	にたいし(て)	0
を通して	17	をとおして	0	に関して	11	にかんして	0
に至るまで	8	にいたるまで	0	を通して	6	をとおして	0
に関して	7	にかんして	0	に至るまで	1	にいたるまで	0
を通じて	6	をつうじて	0	に際し(て)	1	にさいし(て)	0
に際し(て)	2	にさいし(て)	0	を通じて	1	をつうじて	0
から言えば	1	からいえば	0	から見れば	1	からみれば	0
から見れば	1	からみれば	0	から見ると	1	からみると	0
を巡って	1	をめぐって	0	から言うと	1	からいうと	0
(の) 折に	1	(の) おりに	0	から見て	1	からみて	0
に就いて	0	について	159	に就いて	0	について	112
に於いて	0	において	124	に於いて	0	において	63
に因って	0	によって	70	に因って	0	によって	42
と言った	0	といった	43	に因り	0	により	21
に因り	0	により	32	と言った	0	といった	7
に因ると	0	によると	5	を初め・始め	0	をはじめ	2

【表5】から、格助詞性複合辞の仮名と漢字の表記について、以下の点が指摘できる。

- ・『日本語教育』『日本語の研究』を通じて仮名でのみ表記されている格助詞性複合辞としては、「について」「において」「によって」「により」「といった」の5語がある。
- ・両誌を通じて漢字でのみ表記されている格助詞性複合辞は、「に対して」「に関して」「に至るまで」「に際して」「を通じて」「を通して」「から見れば」の7語である。
- ・両誌ともに仮名表記も漢字表記も見られる格助詞性複合辞は「をもって/を以

て」であり、また、1誌では両様の表記が見られるが、もう1誌では仮名表記のみの格助詞性複合辞は「をはじめ/を始め」(『日本語教育』では両様、『日本語の研究』では仮名表記のみ)である。

また、両誌において両様の表記がある語についてその割合を調べた結果を【図1】に示す。

	漢字表記		仮名表記	
日本語教育	を以て	20.00	80.00	をもって
	を始め	50.00	50.00	をはじめ
	に当たって	33.33	66.67	にあたって
日本語の研究	を以て	66.67	33.33	をもって

【図1】『日本語教育』『日本語の研究』に両様の表記がある語

両誌を通じて両様の表記が見られる「をもって/を以て」について、両誌を比べると、『日本語教育』では仮名表記は4例、漢字表記は1例であり、偶然性を考慮に入れると、いずれが多いともいいがたい。『日本語の研究』では仮名表記は1例、漢字表記は2例である。

また、「ヲモッテ」については抽象的意味の名詞を受ける場合の表記に言及した本多(2019)もあるが、本稿では「持つ」の意味が形骸化した複合辞としての用法に限定した用例数を掲げる。

以上、仮名表記か漢字表記か学習者が迷った場合の参考になるデータという意味で、調査・記述した。

7. 『國學院雑誌』における格助詞性複合辞の出現状況

7.1 その先の『國學院雑誌』における格助詞性複合辞の全体的使用状況

次に、上述の両誌よりもより幅広く文学・歴史・宗教・哲学の分野にわたる学術雑誌である『國學院雑誌』における格助詞性複合辞の使用状況について調査する。『國學院雑誌』は、明治27年に創刊され、国内でも有数の歴史を誇る月刊学術雑誌として高い評価を得ている。国史国文の研究という趣旨を継承し、國學院

大学の教員をはじめとする執筆者が各分野の研究論文を発表しているほか、國學院大學の教員によるエッセイ「談話室」や新刊書の書評・紹介も掲載し、年に一度(11月)分野限定の特集号を刊行している。

『日本語教育』『日本語の研究』の論文本数に合わせ、『國學院雑誌』第122巻 第1-3号(2021年)に掲載された学術論文10編を対象とする⁽¹²⁾。また、『日本語教育』『日本語の研究』の調査方法と同様に、母語話者の格助詞性複合辞の使用状況を全体的に把握するという目的のため、『國學院雑誌』にある学術論文のうち、母語話者以外の研究者が発表した論文は分析の対象外とした。調査対象とする『國學院雑誌』の学術論文は、「論文」とし、「談話室」「書評」「紹介」は対象外とした。また、母語話者が執筆した各論文の中で考察対象とするのは、「題目」「要旨」「本文」と「謝辞」の部分である。学術論文の「参考文献」は、調査対象者以外の論文のタイトルと情報が含まれるため、対象外とした。論文に引用している例文・資料も対象外とする。

また、『日本語教育』と『日本語の研究』と同様、以下のような用例は格助詞性複合辞に該当しないと判断し、用例から除外した。

- (4) 「二三の翻案を試みたらしい跡が見える」といったが(後略) (「といった」)
- (5) 次に叙述の面からみてみよう。(「からみて」)

今回の『國學院雑誌』の調査において、このような観点から除外した用例は、計39例あった。

『國學院雑誌』に掲載されている母語話者によって書かれた学術論文は10本であり、総語彙数(記号・補助記号・空白を除く)200,469語、格助詞性複合辞1,608語(延べ語数)が得られたため、『國學院雑誌』の学術論文における格助詞性複合辞の出現率は0.80となる。『日本語教育』の出現率0.82、『日本語の研究』の出現率0.67の中間におさまっている。

以下、検出された出現頻度の割合(延べ数) $\geq 1\%$ の格助詞性複合辞に絞って、『國學院雑誌』に現れる格助詞性複合辞を延べ語数が多い順に【表6】にまとめた。

【表6】の上位に出現している格助詞性複合辞を見ると、出現頻度の順位にはやや違いがあるが、それぞれの格助詞性複合辞は『日本語教育』『日本語の研究』の

(12) 調査対象とする論文本数と検索総語数を後の「付録3」にまとめた。

【表6】『國學院雑誌』における上位に出現する格助詞性複合辞

國學院雑誌 (N=1,607)				
	格助詞性複合辞	出現頻度	%	平均出現数
1	として	351	21.84	35.10
2	という	325	20.22	32.50
3	について	292	18.17	29.20
4	において	154	9.58	15.40
5	との	118	7.34	11.80
6	によって	106	6.60	10.60
7	に対し(て)	50	3.11	5.00
8	に関して	26	1.62	2.60
9	により	25	1.56	2.50
10	にして	21	1.31	2.10
11	といった	21	1.31	2.10
	計	1489	92.66	

両誌に出現する割合とは大きな差がなく、概ね共通していることがわかる。また、『國學院雑誌』において使用されている格助詞性複合辞の出現頻度の割合(延べ数) $\geq 1\%$ は、異なり語数11であり、『日本語教育』の11(上述)と同じである。(『日本語の研究』の10より多い)。また、『國學院雑誌』では、『日本語教育』『日本語の研究』の両誌の上位には出現していない「にしては」が上位に出現している。

また、44種の格助詞性複合辞のうち、『國學院雑誌』に出現していないのは、「からいえば」「からいうと」「からいって」「(の)おりに」「(の)おりから」「にかけると」「につけて」「でもって」「によったら」「によらず」「ところの」の11語であることがわかる。これらのうち、「からいって」「にかけると」「(の)おりから」「でもって」「によったら」「によらず」の6語は3誌とも出現していない。残り5語のうち、「からいえば」「につけて」「ところの」は『日本語教育』にのみ、「からいうと」「(の)おりに」は『日本語の研究』にのみ出現している。

7.2 『國學院雑誌』における格助詞性複合辞の表記の傾向

以下、『國學院雑誌』における仮名表記のみと漢字表記のみ格助詞性複合辞を以下の【表7】にまとめた⁽¹³⁾。

(13) なお、前掲44語の格助詞性複合辞中、漢字表記のありうるものとしては、他に「からいえ

【表7】『國學院雑誌』における仮名表記・漢字表記の出現状況

漢字表記		仮名表記	
に対し(て)	50	にたいし(て)	0
に関して	26	にかんして	0
を通して	10	をとおして	0
に際し(て)	5	にさいし(て)	0
を通じて	4	をつうじて	0
から見れば	1	からみれば	0
に就いて	0	について	292
に於いて	0	において	154
に因って	0	によって	106
に因り	0	により	25
と言った	0	といった	21
に因ると	0	によると	7
から見たら	0	からみたら	1
から見ると	0	から見ると	1

まず、漢字表記のみがみられる格助詞性複合辞は、『國學院雑誌』では上記6語であったが、この6語はすべて『日本語教育』と『日本語の研究』でも漢字表記のみであった。(『日本語教育』で仮名表記だけであった「をめぐって」、『日本語の研究』で仮名表記だけであった「からみて」(前掲【表5】)は、『國學院雑誌』には見られない。

次に、仮名表記のみの格助詞性複合辞は、『國學院雑誌』では上記8語であったが、このうち「について」「において」「によって」「により」「といった」の5語は『日本語教育』と『日本語の研究』でも仮名表記のみであった。また、「によると」は『日本語教育』と同様、仮名表記のみであり(『日本語の研究』には見られない)、「から見ると」は『日本語教育』では漢字表記であり(『日本語の研究』には見られない)、「からみたら」は他の両誌には出現していない(前掲【表5】)。

また、『國學院雑誌』で仮名と漢字の両様の表記が用いられている格助詞性複合辞の出現状況を示したのが下の【図2】である。

ば」「からいうと」「から言って」「(の)おりに」「(の)おりから」があるが、これらについては漢字表記・仮名表記とも出現していなかった。

漢字表記		仮名表記	
に至るまで	83.33	16.67	にいたるまで
から見て	75.00	25.00	からみて
を以て	41.67	58.33	をもって
に当たって	28.57	71.43	にあたって
を始め	25.00	75.00	をはじめ
を巡って	25.00	75.00	をめぐって

【図2】『國學院雑誌』に両様の表記がある語

【図2】に示した6語のうち、「を以て」は他の両誌では漢字表記も仮名表記も出現する。しかし、他の2誌では漢字表記の方が多く見られるのと違い、『國學院雑誌』では仮名表記の方が多く出現している。「をはじめ」「に当たって」は『日本語教育』でも、両様の表記が行われている。一方、「に至るまで」は『日本語教育』『日本語の研究』でも、漢字の表記が行われている。「をめぐって」「から見て」は『國學院雑誌』にのみ出現している。（「をめぐって」は『日本語教育』には漢字表記であり（『日本語の研究』には見られない）、「から見て」は『日本語の研究』には漢字表記であり（『日本語教育』には見られない）（前掲【図1】）

8. まとめと今後の課題

今回の調査においては、母語話者によって書かれた学術論文における格助詞性複合辞の使用状況を把握するために、日本語教育、日本語学関係の学術論文の格助詞性複合辞の全体的な使用状況を調査し、あわせて『國學院雑誌』とも比較して以下のことが明らかになった。

- I. 母語話者によって書かれた学術論文に出現する格助詞性複合辞について、『日本語教育』と『國學院雑誌』の使用率はそれぞれ0.82, 0.80と近く、『日本語の研究』の0.67に比べると高めである。また、『國學院雑誌』に使用されている格助詞性複合辞の異なり数は11で、『日本語教育』の11と同じ、『日本語の研究』の10より1つ多い。
- II. 学術論文に用いられている格助詞性複合辞の表記については、3誌とも仮名表記の語として「について」「において」「によって」「により」「と言っ

た」があり、3誌とも漢字表記の語として「に対して」「に関して」「を通して」「に際して」「を通じて」「から見れば」があり、3誌とも漢字と仮名の両様の表記が見られる語として「をもって/を以て」があった。

今回は、実際の使用状況の解明という観点から、人文系の日本語教育領域と日本語学領域における学術論文に出現する格助詞性複合辞の使用状況を分析した。今後は理系など他の領域まで拡大し、本研究との相違を検討しながら調査して行きたい。

学術論文を調査対象として分析し、様々な分野における母語話者による使用頻度の高い格助詞性複合辞を明らかにすれば、日本語教育場面で日本語学習者に理解しやすい実践的な内容を指導するための参考資料を提供することが可能であると考えられる。調査対象の幅も拡大し、助詞性複合辞と助動詞性複合辞まで調査して、得られた研究結果を踏まえ、日本語教育に応用できるデータを構築し、日本語教育場面でどのように取り入れるかについても検討していきたい。

参考文献

- 佐藤尚子 (1989) 「現代日本語の後置詞の機能」『横浜国大言語研究』7, 横浜国立大学国語国文学会, pp.35-44
- 佐藤尚子 (1990) 「後置詞と前置詞一名詞の格の周辺一」『国文学 解釈と鑑賞』55-1, 至文堂, pp.151-158
- 徐衛 (2020) 「日本語母語話者と学習者の学術論文における接続詞の調査」『花園大学文学部研究紀要』52, pp.18-25
- 鈴木重幸 (1978) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 砂川有里子 (1987) 「複合助詞について」『日本語教育』62, pp.42-55
- ターインタ, プーフット (2018) 「日本語学系学術論文におけるモダリティの使用: 結論におけるモダリティの使用を中心に」『日本語・日本文化研究』28, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻, pp.139-149
- 高絹 (2014) 「日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察」『日本語・日本文化研究』24, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻, pp.104-114
- 高橋太郎 (1983) 「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp.293-316
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』(ひつじ研究叢書〈言語編〉85), ひつじ書房, pp.44-46
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における複合格助詞について」『日本語学』10-3, 明治書院, pp.78-95
- 本多由美子 (2019) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における複合助詞の表記一動詞の漢字表記に着目して一」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4, 国立国語研究所, pp.94-105
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』

2号, pp.27-51

森田良行, 松木正恵 (1989) 『日本語表現文型：用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子 (2012) 『日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版

付録 1 調査対象とした『日本語教育』の詳細

発行年	調査対象		論文数	検索総文字数
2021年	179号	寄稿論文、研究論文、調査報告	10	163790
	計		10	163790

付録 2 調査対象とした『日本語の研究』の詳細

発行年	調査対象		論文数	検索総文字数
2020年	16巻1号	論文	1	16060
	16巻2号	論文	2	28161
	16巻3号	論文	1	16378
2021年	17巻1号	論文	1	18657
	17巻2号	論文	1	16579
	計		6	95835

付録 3 調査対象とした『國學院雑誌』の詳細

発行年	調査対象		論文数	検索総文字数
2021年	第122巻第1号	論文	3	60575
	第122巻第2号	論文	4	75349
	第122巻第3号	論文	3	64545
	計		10	200469